

行 動 科 学 1 c

【単位数：0.5単位，授業8コマ（定期試験含まず）】

1 科目責任者

鈴木孝太 教授（衛生学）

2 教育目標

（1）ねらい（Ⅰ-7-c，Ⅱ-1-c，Ⅲ-6-c）

- ① コンピテンス「プロフェッショナリズム」における，医師としての価値観・態度・姿勢を身につけるために，自分の行為と決断を振り返り，客観的に自己評価を行った上で，自己の目標を設定し，どのように達成することができるか，その方法を見出すことができる。
さらに，「コミュニケーション」における，個人同士だけではなく，集団，社会との適切なコミュニケーションをとり，「医学知識と科学的探究心」に基づいて人の健康行動につながる特に心理的，社会的要因について理解し，健康増進の方法を説明できる。
- ② 行動科学1cではまず，自らの行動や生活習慣について，健康増進や疾病予防，医学・医療におけるさまざまな場面をもとに客観的に評価することを目的として，医療に関わる多様で具体的な事例を学ぶ。
さらに人の行動・個人の多様な行動を知る。その上で，健康増進（ヘルスプロモーション）につながるさまざまな行動変容についての理論を学ぶことで，行動変容のためにどのような方法があるのかを知り，まずは自らの行動や生活習慣を改善するための具体的な方法論を身につける。
これらを通して，プロフェッショナリズム1a，行動科学1a，1bで学んだ知識・概念についての理解を深める。
また，2学年次の行動科学2で，自身のみならず他者を含む集団について，健康なコミュニティづくりを目標とした社会の仕組みを学ぶ上で，基礎的な知識，スキルを身につけることを目標とする。
行動科学は，プロフェッショナリズムとも連携して，総合的な理解を進め，実践につなげることを求めるものである。

（2）学修目標

- ① 社会で生活する人々の多様な行動，生活習慣を知り，自らの行動，生活習慣について客観的に説明できる。
- ② 医学・医療における具体的な事例について，医療従事者，患者・家族など多様な視点でその行動を説明できる。
- ③ 健康増進（ヘルスプロモーション）や疾病予防における行動変容について，基本的な理論を説明できる。
- ④ 行動変容の理論を用いて，自らの行動や生活習慣を改善する方法を提案できる。
- ⑤ 非日常的な場面での人間の心理や多様な行動について学び，リスク管理，危機管理の概念を具体的に説明できる。

3 成績の判定・評価

（1）総合成績の対象と算出法

	成績 対象	割合	方法・コメント
確認テスト	○	20%	記述式及び多肢選択問題
レポート	○	80%	適宜実施し，記述内容により評価する。
その他	○	—	受講態度などにより，総合成績に加減点（最大10%）する。加点により100点を超える場合は100点とする。

出席：成績評価の対象となるためには講義の欠席率が3分の1を超えてはならない。

(2) 合格基準

評価対象の合計が60%以上(又は60点以上)で合格とする。

(3) 再試験・再評価の方法

再試験は、原則として確認テストに準ずる方法で実施する。

(4) 課題(試験やレポート)へのフィードバック

レポート、確認テストについては、講評を作成し適宜メールで通知する。

4 教科書

書名	著者名	出版社	教科書として指定する理由
保健・医療・福祉における 行動科学入門 生活習慣の評価から行動変容の実践まで	鈴木孝太 柿崎真沙子 菊池宏幸 (編・著)	大修館書店	本学のカリキュラムと、医学教育コアカリキュラムに沿ったテキスト。プロフェッショナルリズム1a(医療人入門)、行動科学1c、行動科学2、健康増進と疾病予防の内容に準拠している。
各講義における配付資料			

5 参考図書

書名	著者名	出版社	参考図書とする理由
行動医学テキスト	日本行動医学会	中外医学社	医学教育コアカリキュラムに準拠し行動科学を網羅した良書。
Behavioral Science(7th edition)	Barbara Fadem	Wolkers Kluwer	アメリカの行動科学の標準テキスト。米国USMLEの問題も掲載し、利用価値は高い。
行動科学 健康づくりのための理論と応用	畑 栄一, 土井由利子 編	南江堂	個人の行動変容を促す方法を学ぶ上で有用。
医療・保健スタッフのための健康行動理論の基礎 生活習慣病を中心に	松本千明	医歯薬出版	特に生活習慣病を対象に、実際に行動変容を促す方法を学ぶのに有用。
健康行動と健康教育	Karen Glanzら (曾根智史ら 訳)	医学書院	健康教育を含め、行動変容を促す方法を学ぶのに有用。
Theory in a Nutshell	Don Nutbeam ら	McGraw-Hill Education	ヘルスプロモーションのさまざまな理論がまとめられている。
医療現場の行動経済学 すれ違う医者と患者	大竹文雄, 平井 啓	東洋経済新報社	行動経済学の視点から、医療者、患者の考え方を説明している良書。

6 準備学習(予習・復習)

授業に臨むにあたり、「保健・医療・福祉における 行動科学入門」などで、講義内容について簡単に情報収集しておく(1コマあたり0.5時間程度)。

授業後、その授業までに知っていたこと、また授業で初めて知ったこと、さらに自らの生活や学習について、講義内容をどのように役立てることが可能か、というテーマなどのレポートを課すので、それらのテーマに沿ってレポートを作成する(1コマあたり0.5時間程度)。

7 授業計画

(1) 講義の方法

講義については、基本的に大教室での知識伝達型の講義であるが、講義中、一部、小グループ討論や講師との質疑応答などのアクティブ・ラーニングを導入する。

(2) 講義の内容

さまざまな状況における人間の行動について、実際の例を中心にその背景にある理論などを学ぶ。